

- 1 派遣期日 平成29年6月17日（土）
- 2 研修先 学校名（会場名） ①新宿区立四谷小学校 / ②豊島区立池袋第三小学校
所在地 ①〒160-0004 東京都新宿区四谷2丁目6番地
②〒171-0021 東京都豊島区西池袋3-14-3
① <http://www.shinjuku.ed.jp/es-yotsuya/index.html>
② http://toshima.schoolweb.ne.jp/ikebukurodai3_e/
- 3 研修内容 日本生活科・総合的学習教育学会 第26回全国大会 東京2017
(1)授業公開 総合的な学習 第6学年「四谷の未来創造プロジェクト」を参観

【本時の流れ】

- ①子どもたちがアンケート結果を分析し、結果から自分たちに何ができるのかを考える。
- ②ブレインストーミング法を使い、友達と意見を出し合う。
- ③学級で「食べる」「知らせる」「育てる」という分類で意見を集約し、次時へつなげる。

ア 思考をつなぐ体験活動

体験的な活動が意図的に計画されることによって「体験活動」は「深い学び」になっていくことが確認することができた。本単元では、導入に6学年による「とうがらし集会」を扱うことで興味・関心を引き出している。また、子ども達は内藤とうがらしの苗を普及させている「四谷地区協議会へのインタビュー」で熱い思いを聞いている。そして、同じ四谷に住む自分たちと四谷地区協議会の方との「内藤とうがらし」を大切に思う気持ちの違いにギャップを感じたことから、地域に「アンケート」を行った。必要感が生まれたときに、子どもたちの思考をつないだ体験活動を行う事で、「主体的な学び」となっていた。そして、振り返りの時間や交流の時間を使って、分析・整理をすることによってより「深い学び」へつなげるというサイクルができていた。

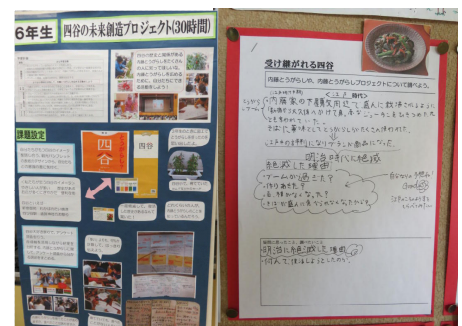
イ 教師の受容する態度

子どもたちが地域の人にアンケートをとった結果、地域の人も「名前は知っているけれど食べたことが無い」という人が多かった。そのため「地域にもっと広めるための手立て」を考えることとなり、本時がスタートした。子どもたちの手立ての中には、到底実現できないだろうという意見が見られた。「内藤とうがらしを育てた人は税金が1%減る」「内藤とうがらしを町中につけて、においを人々にかがせて広める」「四谷の町を内藤とうがらしを宣伝する車で走り回る」などである。その意見を教師が子どもたちの意見を切り捨ててしまうことは簡単である。しかし、授業者の対応を見て子どもにいかに関心を持って考えていくことが大切なのではないかと改めて実感した。授業者は、子どもたちの発言を一度受け入れていた上で問い返していた。そして「内藤とうがらしのにおいかいだことある人いる？」という問い返しをした。手を挙げた児童は数名で「まだ内藤とうがらしを人へ広めるには至っていない自分」に気付くことができたのである。このように子どもたちの意見を受容し、言葉を繰り返したり聞き返していくことで、教師が意見を引っ張らなくても子どもたちの思考は深まっていた。

ウ 環境づくりの工夫

子どもたちが今まで調べたことの掲示が細やかにされていた。また、取り組んできた活動内容が分かりやすく掲示されていた。これらの環境づくりが子どもたちの興味関心を引き出すとともに、子どもたちの思考も整理されているのだと感じた。

(右：児童作成資料 左：活動内容の掲示)



(2) 授業研究会

【授業研究会の流れ】

- ①新宿区立四谷小学校 校内研究について
- ②授業者による自評（新宿区立四谷小学校 大橋 英之先生）
- ③質疑応答
- ④助言者による講話（山形大学 准教授 野口 徹先生）

【授業研究会に参加して】

様々な意見が子どもたちから出た際に、できるかできないかは実践する前に判断することはできない。子どもたちの気付きをどう拾って可視化するのが教師の授業力に大きく関わってくる。特に生活科・総合的な学習の時間は子どもたちが感じたズレや違和感に光を当てる事によって、子どもたちの追究したいという意欲を引き出すことができる。助言者の野口先生から、ある保育園での実践を紹介頂いた。そこでは、子どもたちが実践することに対して制限がなく、遊びを通して高度な気付きを重ねている様子が見られた。例えば、給食で野菜や果物が出ると種を埋めてみる。種がどのように成長するか、とにかく試してみる。試す中で分からないことは本で調べる。保育園の子どもが行っていることは、まさに「生活科・総合的な学習」である。こういった経験を積み重ねることによって、「学ばって面白い」という感覚が身に付くのだと感じた。教師がゴールを決めるのではなく、子どもの思いつきにとことんつきあっていく。そういった態度が教師に必要である。

(3) 自由研究会

総合的な学習において「深い学び」を促進する指導の在り方
～「地域の絆を再生させよう」（小学校高学年 福祉）の実践を通して～
（新潟県五泉市教育委員会 金 洋輔先生）

①子どもたちの思いを生かした「1次体験」

ギャップや切実感をもたせる資料を提示することで、子どもたちは自ら問題点に気が付き、自分事の問題として捉えていた。「一人暮らしの高齢者が多く、さみしい思いを抱えている」という地域の思いを知り、「お年寄りのさみしさをどうすればよいか」という問いを自らもつことができていた。さらに、教師が意図的に地図を提示し、「地域福祉協議会等と連携・協働しながら高齢者が誰でも気軽に交流できる場（「地域の茶の間」）が自分たちの地域にない」という事実から「高齢者のさみしい気持ちをなくすために『地域の茶の間』をつくろう」という活動を組んでいた。そして学校付近のコミュニティハウスを借りて「地域の茶の間」を複数回開催し、茶の間についての理解を深めていた。

②揺さぶりと「2次体験」

「1次体験」で満足させるだけでなく、効果的な資料の提示で揺さぶりをかけ、「2次体験」につなげていた。過去に運営された「地域の茶の間」が一過性の取り組みになったという事実を提示し、揺さぶりをかけたのである。そして、「一時的ではなく、ずっと高齢者のさみしい気持ちをなくすにはどうすればいいか」という問いをもたせた。そこで、継続して行っている「地域の茶の間」をモデルケースとして見学調査に行くという活動を設定していた。

③「1次体験」と「2次体験」から知識を構造化する

「1次体験」で共通の問いをもたせ、「2次体験」につなげていくことでより深い気付きにつながっていた。今回は2つの体験をつなげることで「茶の間を作る」ことが目的でなく「年齢に関係なくみんなが大切だと感じる場所」を作るという概念的知識を獲得していた。

4 感想

どの実践でも児童の思考の流れを大切に、必然性をもって活動が行われていた。子どもたちの思考を深める教育計画と教師側の提示資料の精選の重要性を感じた。